

南の風
達摩町と春地
細子文六

南　　の　　風
達磨町七番地

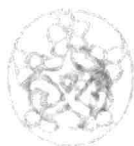
獅子文六作品集

第二卷



文藝春秋新社

獅子文六作品集第二卷
南の風・達磨町七番地 他



著者	獅子文六
發行者	鷺尾洋三
印刷者	村尾一雄
發行所	文藝春秋新社
	東京都中央区銀座西五ノ五 振替口座東京七四二三四番
印刷	大日本印刷株式會社
オフセット	東海美術印刷
製本	加藤製本所

昭和二十七年五月二十五日印刷
昭和二十七年六月一日發行
定價 二七〇圓
地方賣價 二八〇圓

Printed in Japan

目

次

南の風

暑い童話……………七

空氣銃の名手……………二

腹立ちの花……………三

昔は昔……………三

母のはかりごと……………四

女々郎……………五

わが胸の燃ゆるおもひ……………六

先客……………八

都塵……………一二

水中花あり……………一五

忍びざるの心……………一九

巷間鬼語……………一三

南の客……………一七

じゃじゃ馬馴らし……………一九

重助の話……………九四

雲動くは秋のしるし……………二〇

落武者……………二六〇 昔の女……………二四〇

雲耶山耶……………二六六 南の風……………二五一

達磨町七番地……………二六一

日本最眞……………三二三

藝術家……………三一九

吞氣族……………三三九

あとがき……………三五九

装幀 安井曾太郎
カット 宮田重雄

南
の
風

暑い童話

三月十二日の午前——それなのに、なんとといふ暑さだ。部屋の中にあっても、ツルリと、汗が頸筋を走る。着いてから、今日が、一番暑いのではなからうか。

「君、アイス・クリーム喰べようよ」

と、湯氣が出さうに、顔を眞ッ赤にして、十七八の少年が、呼鈴の紐に、手を伸ばした。

「わしは、喰はん」

薄汚れた、白い壁に凭れて、一つ二つ年蒿らしい方が、口重に、答へた。チヂミ襦衣一枚になつた軀も、ズングリと巨きく、色の黒い額に、逞しい面皔が吹き出ている。

「でも、君、このアイス・クリームは、東京より、よつぽど旨いんだぜ」

色の白い方の少年は、熱い國へくる旅支度もしてない

のか、貸浴衣のダラシない姿を、向き直つた。

「さうかも知らんが、わしはもう喰はん……。あんたは、毎日、二度も三度も、よう註文するね」

と、暗に、相手の濫費を戒めるやうな、口吻だつた。

「だつて、暑いんだもの……」

と、素直な抗議をしたものの、どうやら、註文は思ひ止つたらしかつた。

色の白い方が宗像六郎太、黒い方が加世田重助といつて、二人は、日本郵船の香取丸で、五日前に、ジョンストン・ピアール頭へ、着いたばかりなのである。

二人は、船の中で知り合つた。三等船室の養蠶棚のやうなシートが、偶然、隣り合せだつたばかりでなく、どつちを向いても、大人ばかりの船客の、それも中國人と黒人が大半を占める中にあつて、心細い初旅の二人が、すぐ仲好しになつたのは、當然のことだつた。話してみれば、行先も同じシンガポールで、同じやうに懷中が輕くて、上海も、香港も、上陸見物はせずに、蓖麻子油のやうに臭い船室の空氣を、十餘日も一緒に吸つてあるうちに、大人には信じられないほどの友情が、結ばれてきたのである。

「わしは、出迎への人と、すぐに、奥地へ行くけれど、

あんな、忘れずに、手紙下さいよ。生涯仲よく、交際しようね」

「うん、僕も君を忘れないよ。暫くしたら、君を、農園へ訪ねて行くかも知れないよ」

下船の前夜に、二人は、固く約束した。といふのも、重助は鹿兒島縣の生れで、郷村の縁故を辿つて、マレー半島のカメロン高原に、働きに行くことになつてゐたからだが、六郎太の方は、なんの目的で、東京からシンガポールへ行くのやら、どういふ身分の少年やら、一向、得體が知れなかつた。それを、深く訊きもせず、明かしもせず、べつに水臭いとは思はないのは、やはり、大人の友情と違ふところなのだらう。

だが、二人が勇躍して降りた埠頭には、重助の出迎人の影もなかつた。やむなく、彼は、六郎太に従つて、日本人街の旅館積善館に宿をとり、農園の知人に手紙を書いて、出迎へを頼んだ。そんな手違ひで、重助の快々たるにひきかへ、六郎太の方は、見るもの聞くもの、面白くて耐らない風で、たとへば、強い香料の入つたアイスクリームにしたつて、機会さへあれば、日に二度でも三度でも、喰べたくなる――。

「ぢやア、散歩に行かうよ。植物園へ、もう一度、行つ

てみないか。今度は歩いて……」

六郎太は、頻りに、重助を誘つた。

着いた翌日に、六郎太が奢るといふ約束で、自動車に頼み、有名な植物園と、タンジョン・カトンの海岸を見物した。小石川の植物園を考へてゐた六郎太は、野生の猿群が園内の巨樹に駆け上る光景を見て、ひどく驚いた。タンジョン・カトンへ行く途中で、坦々たるドライヴ・ウェイの側の小川に、まだ鰐が棲んでゐるといふ話を聞いて、もつと驚いた。その驚きの度に、かれの魂は、ハンモックに揺られるやうに、快く揺れるのだ。

「ねえ、家にゐたつて、つまらないぢやないか」

だが、重助は、氣が進まないらしく、なんとも、返事しなかつた。

彼としては、見物どころではないのである。もともと、縣の農學校を途中で止めたのも、さうして南洋へ志を立てたのも、米が二十圓臺に下つた農村の苦境からで、そんな中から、親が工面してくれた旅費を、便々と、旅館で使つてゐるのさへ、辛くてならないのだ。變つた風景や風俗など、ちつとだつて、興味は呼ばず、一日も早く、奥地から出迎人のくるのを、待ち焦れてゐるのである。

「あんた一人で、出掛けなさつたら、えゝ」

やつと、彼は、口をきいた。

「一人ぢや、つまねえや」

とはいつても、六郎太は、べつに、不平さうな様子もなく、散歩は忘れたやうに、窓際へ立つて行つた。

窓の下は、狭い横丁になつてゐて、南洋櫻の赤い花が、微風に、ヒラ／＼動いてゐる下に、中華ソバ屋のやうな、屋臺店が出てゐた。

「あ、君、きて御覽よ、ライス・カレー屋だ。ライス・カレー喰つてゐるぜ」

六郎太は、面白がつて、聲を立てた。黒館のやうに黒い皮膚のお客が二人、それ／＼、蓮の葉のやうなものに、飯を盛つて、人蔘色の汁をかけたのを、片手で、仰ぐやうにして、口の中へ、抓み込んでゐた。

「旨さうだな。喰べてみてえなア」

と、その光景に眼を離さず、後向きで、重助に話しかけたのだが、

「あぎやんの喰べなはつたら、舌が曲りますばい。辛うて、辛うて……」

代りに返事したのは、女中のお玉だつた。女中といつては、氣の毒なほど、小さい、可愛い、お玉だつた。

「なんだ、お玉さんか。……君、喰べたことある？」

「喰うたことはござりませんが、辛うござりますたう」

お玉は、桑の實のやうな瞳を、一心に睜つて、さう斷言した。肌こそ淺黒いが、鼻筋がよく通つて、東京なぞには殆ど見られない富士額で、髪が濃くて、唇が眞ッ赤で、顔だけ見れば、今年十六の少女とは思はれないほど整つてゐた。彼女は六郎太達より、僅か三月ほど早く、九州の天草からこの土地へ渡つて、積善館で働いてゐるのだが、なにかにつけて、先輩振りを誇示した。受持の部屋とはいへ、とかく、二少年のところへ話し込んで、帳場で叱られ勝ちなのである。

お玉は、どちらかといふと、六郎太と話が合ふらしく、窓際に肩を列べて、シンガポールの草分は、ラッフルスといふ英國人であるとか、印度人の商店では、夕方になると香を焚くとか——頻りに、通を振り廻してゐたが、ふと、重助の方を見ると、浮かない顔で、もの想ひに、沈んでゐるのである。

「加世田さんな、いつも黙り込んで、暑苦しか……」

彼女は、ちよつと擲擻つてみたくなつた。

「汝こそ、黙つとれ！」

重助は猛然と、吠え立つた。

「お、魂消つた……。太か聲ね」

お玉は、腹を抱へて、笑つた。六郎太も一緒に笑つた。

「加世田君は、農園から迎へての人が、まだ来ないんで、悲觀してるんだよ。船ん中ぢや、とても元氣だつたんだぜ。南洋發展論といふのを、毎日、聞かしてくれただ」

六郎太のいふとほりだつた。しかし、そればかりでもなかつた。お玉が、六郎太と睦まじく話してゐるのを見ると、氣が沈んだり、腹が立つてくるのである。

「悲觀しても、つまらない……来る時にや来るけん」

お玉は、呟くやうにいつた。

「あゝ、また、アイス・クリームが喰ひたくなつた……。お玉さんがきたから、ちやうど、いゝや。頼むぜ、三つ！」

六郎太は、お玉にもご馳走するつもりで、三本指を出した。

「わしは、喰はん」

重助は、機械的に首を振つた。

「そんなこと、いふなよ。僕も、これで、當分喰はない

ことにするから、今度だけ交際^{つきあひ}へよ」

とまで、いはれると、重助も、承諾の外はない。彼だつて、ほんとは、喰べたかつたのだから——

「はい、すぐ、註文して参ります」

お玉は、木に竹を繼いだやうに、女中言葉になつて、廊下へ出て行つたが、一分と經たないうちに、再び、姿を現した。

「こちらのお座敷でござります」

彼女の案内で、白い詰襟服を着て、ヘルメット帽を手に持つた男が、ヌツと、入つてきた。

（あ、農園の人だ！）

重助は、天にも昇る氣持で、腰を浮かしかけた。

「宗像六郎太さん、おいでですか」

その男は、二人の顔を素早く、見比べた。

「僕です」

六郎太は、無意識に、答へた。

「いけませんね、無斷で、渡航なさつたりしては……。

東京の男爵家から、保護願ひの電報がきてゐます。お迎への人がくるまで、領事館で保護しますから、一緒に來て下さい。私は、領事館附きの警官です……」

と、いはれて、眼を圓くしたのは、重助とお玉の方

で、當人の六郎太は、平然と、不敵の微笑を湛^たへてゐたのである。

それは、今から、十二年前の話だつた。

空氣銃の名手

幼な顔は残る——といふけれど、宗像六郎太の場合には、あてはまらぬやうだつた。

シンガポールへ出奔したのは、十八歳の春だつたが、あの頃は、彼の顔は、剥^むきたての林檎に似てゐた。色が白くて丸顔だつた。コンパスで描いたやうに、まん丸い顔だつた。それが、どうだらう——三十歳になつた今日、似てもつかない、馬面に變つたのである。馬面といつても、顎の細い、顎の長い——あのテではない。もう少し肥つたら、二重顎になりさうに、タツブリ肉附いて、顔全體が長いといふよりも、廣いのだ。顎も、39のカラが、少し窮屈なくらゐだつた。

早くいへば、大きな顔なのである。生意氣だ、大きな面をするなどいはれても、文句のいへない面積をもつてゐる上に、眉、鼻、口、耳等の顔道具が並々でなかつた。

いやにハッキリと、巨きかつた。たゞ、眼だけが、半分眠つてゐるやうに、駭蕩としてゐた。かういふ顔立ちには、近來、俳優にも少くなつて、死んだ澤田正二郎を、最後とするやうである。さういへば、六郎太を澤正に似てゐるといつた藝妓もあつた。あの野心家の俳優の顔から、野心的な表情を全部抜き去つたものが、まづ、六郎太の印象に近いであらう。

顔が、それほど變つたくらゐだから、彼の性格や性行も、おのづから、變らずにゐないのである。手のつけられないほど、腕白で無鐵砲だつた彼が近頃は、スツカリ穩かな、溫和な——といふよりも、些か焦れつたいほど、緩慢な人物になつてゐるのである。

シンガポール出奔は、遠い夢であつた。一體、あの時、彼が三百圓の金を持ち出して、無斷で海外へ渡つた理由は、なにかといへば、彼自身も説明のしやうがないのである。強ひていへば、押川春浪の小説の影響である。昭和三、四年頃には、もう春浪の武俠小説など、讀む少年はあなかつたが、彼は熟讀したのである。といつて、小説の人物を頭に描いて、人外の魔境を探検に行かうなどと、ハッキリした企圖は、ちつともなかつた。彼は、たゞフラ／＼と、熱帯へ行きたくなつたので、ま

た、さういふ誘惑を、すぐ實行に移さねば、氣の濟まぬ性分だつたのである。

その頃は父の男爵宗像彦之進もまだ存命中で、海運界を隠退して閑な時でもあつたらうが、連れ戻された六郎太に、朝晩の窮命は烈しかつた。まつたく、ギョウといふ目に、逢はされたのである。根が、海軍の出身であつただけに、父親は怒つたとなると、火の如く烈しく、鐵の如く酷しかつた。それにもまして、怖かつたのは、母親春乃の無言の叱責だつた。

それに懲りたのか、六郎太は、その後突飛な行狀を改めて、修學院中等部から高等部に進んだ頃に、父の計に會つた。遺言によつて、兄の彦一郎は襲爵を願はず、今は外交官として南米に行つてゐるが、六郎太は、學校を出てから銀行や會社に勤めても、どういふものか、永續きがせず、自分で辭めたり、馱になつたり、果ては、就職を諦めたやうに、この一年來、母親と妹の康子と共に、赤坂區原町の邸に徒食してゐるのである。

二階の、六郎太の部屋から、青葉若葉に埋もれた、山王臺の、森が見える。その下を見れば、鱗を重ねたやうな雲が、せまこましく連つてゐるが、その上を見れば、悠悠たる白雲が仙人でも乗つてゐるかのやうに、空高く、泛

んでゐる。

（空といふものは、不思議なものだ。あんまり見てると、氣がヘンになつてくる）

廣幅の廊下に、蒲團も敷かず、大胡坐を搔いて、空を眺めてゐた末に、六郎太は、そんなことを考へた。

讀書にも、遊び事にも、興味のない彼は、勤務に出ないやうになつてから、ツクネンと、部屋に籠つてゐる時が多いのであるが、他人がおもふほど、退屈してゐるわけでもなかつた。胃腸が丈夫なので、運動をしないでも腹は減つてくるし、空を眺めてあれば、時間の經つのも知らぬほど、空想の種は盡きなかつた。

こんな風にして、一日中、二階を降りて來ない時もあつた。

（俺は、どうも、百ぐらゐまで、生きさうな氣がする……。さうだとしたら、長い間には、俺にも出來る仕事に、ぶつつかるかも知れない）

一團の浮雲の行方を、見送りながら、彼は、誰にともない辯解を試みた。彼の無爲無能は、世間の定評であるから、自分でも知つてゐるのである。さうして、かういふ時代に、かういふ生活をしてゐるのは、彼のやうな非神經質な男でも氣が咎めずにゐないのである。

しかし、彼にしても、働くのが嫌で、遊んでゐるわけではないのだ。働けといはれれば、今日にでも、就職する氣であるのだが、生憎、誰も世話の仕手がなかつた。

「あの男は、遊ばせて置くに限るよ」

宗像家の親戚や知人で、彼をよく知る者は、口を揃へて、さういふのである。彼が、事務の才能をもたないことは、過去の實績でわかつてゐるが、それよりも、彼に事務を執らせるといふことが、本來、なにか滑稽のやうに、人は考へるのである。

「よく、應接間に、金ビカの、動かない、置時計が飾つてあるだらう——つまり、あれだよ」

とまで、辛辣に、實用性を疑はれては、彼の就職も、覺束ないことになつてくる。六郎太の立派な顔と、立派な體格は、確かに、彼を災ひしてゐるやうだつた。最初に入つた銀行で、守衛から擧手の敬禮を受けたのは、重役以外に彼だけだつた。それで彼は、同僚の氣受けを惡くした。次ぎの會社では課長に煙たがられた。デスクの掃除まで自分でする精勤家の課長は、六郎太によつて、自分がコセ／＼してゐることを、反省させられる結果になり勝ちであつた。顔と體が、立派にできてゐるばかりでなく、ノッソリと、いやに悠揚迫らざる態度が、下級社員

として、まったく不向きだつたのである。

といつて、彼を重役に奉るほど、もの好きな會社もないとすれば、失職は、天の命のやうなものだつた。彼は、それをいゝことに遊んでるのでもなく、また不満におもふでもなく、なんとなく、かういふ生活を、一年餘も續けてゐるのである――

「お兄様、お呼びよ、お母様が……」

妹の康子の聲が階下から聞えてきたが、オイソレと、返事をするやうな、彼ではなかつた。空は、まだ眺め足りぬほど、美しく晴れ渡つてゐる。

二度目に、聲をかけられて、

「あゝ、いま行く……」

と、やつと重い腰を上げた六郎太は、アーツと、大きな欠伸をして、廊下を、階段の方へ歩き出したが、そこで、また、足を留めてしまつた。

（おや、珍らしいことだ。雀が、きてゐる……）

彼の視界を横切つて、庭の槇の木の高い梢に、ヒラヒラと舞ひ降りた、一羽の雀を、發見したのである。

下町とちがつて、赤坂あたりにには、雀も相當に棲んでるのであるが、隣りの屋根まで來ても、滅多に、宗像家の庭へは、飛んで來ないのである。雀は伶俐な鳥で、こ

の庭へくれば、災難のあることを、チャンと知つてゐる。

六郎太は、ヂツと、雀を眺めてると、雀が、鳩ほどの大きさに、擴がつてきた。もつと、眼を凝らすと、鴉ほどの大きになつて、黒ゴムを張つたやうな小さな臉が、瞬きするのさへ、ハッキリ見えてくるのである。かうなると、もう我慢ができない。彼は、床の間に立て掛けてあつた銃を、ソツと、持ち出すと、素早く狙ひを定めた。

プツッ

槇の葉が、一、二枚飛んでカサと、雀の體が、小枝に引掛つた。それきり、身動きもしない。一、二分経つても、そのまゝである。六郎太は、小首を傾けて、暫く眺めてゐたが、やがて、もう一發、葉の茂みの中へ、撃ち込むと、雀は、慌てふためいて、空へ飛び去つた。彼は、ニコリ笑つて、それを見送つた。

雀の一疋や二疋、喰つたところで仕様がなないとすれば、無益の殺生である。彼は、いつも、雀の後頸部を掠める程度に、彈丸を通過させるのである。雀は、ちよつと氣絶するが、落ちた衝撃で、活でも入れられたやうに、飛んで行くのだ。今日は、過つて、撃ち殺したかと